Case 1

車いす用除圧機能付エアーセルクッション―有限会社エス・エイチ・アイ

復活果たした伝説のバンド「ROGUE」ライブを支えた車いす用除圧機能付クッション

復活ライブで以前と変わらない歌唱力を披露した奥野敦士さん

2013年10月19日、あるロックバンドが「復活ライブ」を敢行し、ファンを狂喜させた。バンド名は「ROGUE（ローグ）」という。ステージの中央には、半身不随になりながら以前と変わらぬ歌唱力を披露した、奥野敦士さん。リハーサルからアンコールまで、8時間にわたった奥野さんのライブ活動を支えたのが、車いす用除圧機能付エアーセルクッション「Medi-Air 1（メディエアワン）」だった。

●問い合わせ
有限会社エス・エイチ・アイ
埼玉県深谷市宿根1440-7
☎048-573-8456
http://www.shi-j.co.jp/
h-sbt@shi-j.co.jp

頸椎損傷、リハビリに励むも車いすでの課題が浮上

「ROGUE」は1982年に結成。BOΦWY、BUCK-TICKと並んで「群馬が生んだ三大バンドの一つ」と称され、日本武道館で単独ライブを開くほどの人気を誇った。90年の解散後、奥野さんはソロ活動に転じ、俳優や映画音楽制作に活動の場を広げる。ところが、08年9月に不慮の事故で頸椎を損傷し、半身不随になってしまう。

懸命のリハビリの甲斐もあって、車いすに乗れるところまで回復するが、制約も少なくなかった。最大の要因となったのが「底付きによる褥瘡」への不安だった。身体を自由に動かすことができないため、体圧を分散させることができず、褥瘡の原因となるクッションのエアー抜け等による底付きが起きやすくなる。これでは車いすで出かけるにしても、せいぜい1時間、長くても3時間が限界だ。楽しく仲間と語らっても、気がつけば褥瘡ができていて、ベッドの上での生活に逆戻りということもあった。

こうなると、不安感が先行して外出を控えるようになったり、心配のあまり車いすへの移乗自体さえ敬遠するようになる。行動は大きく制限されてしまい、生活意欲の減退にもなりかねなかった。

除圧機能付クッション「メディエアワン」も後押しして復活ライブを敢行

ある日、頸椎を損傷した人たちが集まるフェイスブックでのやりとりのなかで、「褥瘡の原因となる『底付き』を防ぐ車いす用クッション」の存在を知る。奥野さんの車いす（電動）をはじめとする福祉用具を調達していた有限会社エス・エイチ・アイの芝田英行社長が調べてみると、タイヤメーカーの横浜ゴム株式会社が独自技術を駆使して開発した「メディエアワン」が10年に発売され、厚生労働省補装具座位保持装置完成用部品に認定されていることがわかり、デモ期間を経て制度を利用して申請し支給を受けることができた。

自分が意識せずとも、自動的に体圧を分散させる機能がついているほか、血流循環を促す空気圧切り替え機能も備えている。使ってみると、効果はてき面だった。メディエアワンを使うようになってから、明らかに離床時間が延びたと奥野さんは言う。長時間にわたって車いすに座ることになり、行動範囲も広がっていった。そこに、「ROGUE」の再結成が持ち上がる。リハビリと並行して歌唱力の回復にも努めていたところ、バンドの代表曲「終わりのない歌」が注目され、復活を望む声が日増しに高まっていたのだ。

1曲披露するならそれほどの時間は要しないにしても、ライブを開くとなると、リハーサルからエンディングまで丸々8時間は車いす上での活動が求められる。しかしメディエアワンがあるため、その懸念も、もはやない。10月19日に前橋グリーンドームで開いた復活ライブ「GBGB2013」は6000人を動員する盛況ぶりだった。

「メディエアワン」で活動範囲を広げた奥野さん（左）と芝田英行・有限会社エス・エイチ・アイ代表取締役社長

施設を飛び出し映画活動にも思いをはせるように

「外出できること」の意義を、奥野さんはこう強調する。「気分がまったく違います。寝たきりの生活から解放された時はうれしかった。リハビリしていた施設の向かいの焼肉屋へ直行して、まずビールを注文しましたよ」

今は施設から2㎞ほど離れたコンビニエンスストアにも一人で行き、近くの公園でボイストレーニングする。時には友人と飲みに出かけることも。自然と話は弾み、気がつけば数時間にわたることもあるが、底付きの心配はない。施設では決まった時間に食事をとり、消灯時間も一定だが、それだけでは息が詰まってしまう。「人それぞれでしょうけど、僕はたまに『昨日呑みすぎた、朝ご飯はいりません』というくらいがちょうどいい。規則正しい生活を送るロックンローラーというのも、ちょっとね」と、奥野さんは笑うが、これは高齢者ケアにも示唆するところがありそうだ。

早くも次回ライブの企画が進行中だが、映画制作にも携わる奥野さんは「半身不随でも元気な生活を送れるんだっていう映画を撮りたいですね。主人公はもちろん、僕です（笑）」と声を弾ませる。「メディエアワン」が支える奥野さんの活動範囲は、ますます広がりを見せている。

エス・エイチ・アイおすすめの福祉用具

「メディエアワン」は、クッションのなかに2種類のエアーセルが配置されており、全自動で一人ひとりに最適な空気圧を設定。特に褥瘡ができやすい坐骨付近に「底付き検知センサー」を内蔵。体の重みがかかる部分が硬い底面についてしまう「底付き」を起こしそうになると、空気を送り込み回避してくれる。

「メディエアワン」は、大小のエアーセルと大きなガードセルが効果的に配置されているため、常に安定した座面を保つことができる。左右の空気配管を独立させているので、片側へ送る空気量を増加し、体幹の傾きを補正する。

一定の周期で部分的に除圧と加圧を繰り返し、血流循環促進を図る「空気圧切替運転」機能も備える。褥瘡の原因となる底付きを防ぐセンサーにより安定した座面が崩れることはなく、おしりへの違和感もない。座り心地は維持したまま、組織の壊死予防につながる血流改善効果が実証されている。

実際、奥野さんの施設ではメディエアユーザーが増加中だ。「身体障害者だけでなく重度の要介護高齢者など、メディエアワンの機能を求めている人は多いはず。ご利用者様のQOL向上に寄与するためにも、積極的にご紹介したいですね」と、芝田社長は強調している。

「メディエアワン」は介護保険の貸与福祉用具および障害者自立支援法の補装具に指定されている

詳しくは→http://www.yrc.co.jp/medi-air/